

保育士・幼稚園教諭養成課程における授業「造形表現」の展開

小 笠 原 文

Development of “Artistic Work” Lessons for Courses in Early Childhood Care and Education

Fumi Ogasawara

The fields of “music”, “drawing and manual arts” and “physical education” are considered to be the some of the most important subjects for teachers who specialize in early childhood education. In universities and junior colleges, studying the subject of “drawing and manual arts” is necessary for obtaining a license in nursing and also in obtaining a license to become a kindergarten teacher.

This paper highlights the importance of fundamental talent and competency to become an early childhood education teacher. This paper also includes the report of experimental “Artistic Work Lessons” which included the participation of young children and their guardians.

キーワード

造形表現 Artistic Work,

保育内容 Contents of early childhood care and education,

保育者養成課程 Course of early childhood care and education

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1. はじめに

「保育士・幼稚園の先生」が、多くの高校生、とりわけ女子高校生から「将来なりたい職業」として人気を集めている職種であることは、よく知られている。ベネッセ教育研究開発センターが行った「子ども生活実態基本調査」¹の結果によれば、高校生女子が希望する職業の第一位に「保育士・幼稚園の先生」がランキングされている。近年は大学や短期大学の共学化が進み、「保育士・幼稚園の先生」を目指す男子学生も増加の傾向にある。しかし、実際に「保育士・幼稚園教諭養成課程」に入学してきた学生に「保育士・幼稚園の先生になりたい理由」と問うと、若者らしい情熱的な答えに混じり、中には「子どもと遊ぶのが仕事だから楽」「子ども相手なら自分でも務まる」、さらには「と

りあえず資格を取っておきなさいと親に言われたから」などの答えが臆面もなく返され、教師側は暗澹たる気持ちになることもある。本稿は、こうした「乳幼児と関わる仕事」に就くための最も基本的な態度や資質も含め、学生がより多くのことを学び、自らの力として習得できる「造形表現」の授業のあり方のひとつの提案として、実際に乳幼児と行う造形表現を授業内で取り入れた実践報告である。

2. 「造形表現」という科目

「造形表現」という科目は、保育士・幼稚園教諭養成過程を持つ短期大学・大学で保育士資格もしくは幼稚園教諭免許取得のために必要な科目として開講されている。その科目名は「保育内容（造形表現）」、「保育内容指導法（造形

表現)」、「造形表現」、「保育内容(創作活動)」「幼児美術」等、各教育機関により異なるが、これは文部科学省が定める幼稚園教育要領に示される、5領域、すなわち「健康」「人間関係」「環境」「言語」「表現」のうちの「表現」の部分を学生たちが理解し、指導における実践力を身につけていくための科目ⁱⁱである。この5領域とは就学時までに育つことが期待される幼児の「生きる力」の基礎であり、これらに関わる心情、意欲、態度を育てることが、幼稚園教育の達成すべき目標である。幼稚園教育要領と同年の平成20年に改訂された保育所保育指針においては、これまで厚生労働省雇用均等・児童家庭局の局長通知であったものが、厚生労働大臣の告示となり、幼稚園教育要領と同レベルに引き上げられると同時に、従来の養護機能に加え、教育機能(5領域)を持つことが明記され

た。これまでも保育所では幼児教育は行われていたが、それが正規に位置づけられたことにより、保育士を目指す学生も、幼稚園教諭を目指す学生と同じように、この5領域の理解と実践への活用力の習得が望まれるようになったと言える。

しかし、この5領域「表現」に示されている「1ねらい」「2内容」は広範囲にとらえることができる性質のものであり、しかも幼稚園や保育所には小学校のような「各領域に対する指定授業時間数」や「教科書」がないため、その活動内容は各園の方針によって異なってくる。そのため、「造形表現」という科目の目的や内容に対する「拘束力」は少なく、授業は担当の教員に委ねられる部分が多く、シラバスを見ても各教育機関によってその内容は多種多様である。

参考資料1 幼稚園教育指導要領「表現領域」(下線：論者)

1 ねらい

⇒園生活終了時までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

⇒「ねらい」を達成するために、保育者が指導する事項

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりするなどする。
- (8) 自分のイメージや動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

3. 「乳幼児と行う造形活動の実践」を取り入れた授業計画

本学の「保育内容(造形表現)」ⁱⁱⁱは2年次前期に行われる。他に美術・造形に関する科目として1年次後期の「図画工作」(小学校教諭・幼稚園教諭免許・保育士資格いずれも必修)と4年次前期の「保育内容(総合表現)」(保育士

資格必修)が挙げられるが、他大学と比較しても美術・造形に関する時間数の少なさは課題となっている。その限られた時間の中で、学生に最も習得してほしい事柄を「造形活動を通した幼児理解」と設定した場合、「乳幼児と行う造形活動の実践」が不可欠と思われた。以下は2011年度前期に行った「保育内容(造形表現)」全15回の授業内容である。グループA(GA)

は男子学生6名、女子学生14名の計20名。グループB(GB)は男子学生13名、女子学生13名の26名。毎週火曜日の2限目(GB)と4限目(GA)

に行った。実際に乳幼児と共に行ったのは★印の付した2回^{iv}である。

参考資料2 2011年度「造形表現」授業内容

4月12日(火)①	導入。あしあとペタペタ。
4月19日(火)②	乳幼児の描画活動(DVD)あしあとペタペタの写真を撮る
4月26日(火)③	あしあとペタペタの写真と反省をスケッチブックに貼る。 グループワーク→発表→決定。お誕生日壁面構成を考えて、クラスメンバーの顔写真を撮る。
5月10日(火)④	お誕生日壁面構成(GA・GB)
5月17日(火)⑤	お誕生日壁面構成(GA)乗れる動物①(GB)
5月24日(火)⑥	シール貼り準備(GA)乗れる動物②(GB)
★6月7日(火)⑦	子育て支援センター(シール貼りGA)乗れる動物③(GB)
6月14日(火)⑧	シール貼り準備(GB)乗れる動物①(GA)
★6月21日(火)⑨	子育て支援センター(シール貼りGB)乗れる動物②(GA)
6月28日(火)⑩	乗れる動物④(GB)乗れる動物③(GA)
7月5日(火)⑪	乗れる動物④(GA)雨の日のあそび(GB)
7月12日(火)⑫	雨の日のあそび(GA)晴れの日のあそび(GB)
7月23日(土)⑬	ひろしま美術館見学「Go! Go! ミッフィー展」(GA & GB)学外授業
7月26日(火)⑭	《造形あそびまつり》準備+リハーサル(GA & GB)
★8月2日(火)⑮	《造形あそびまつり》(GA & GB)

3. - 1 実践報告「シール貼り」

●場所・対象児について

実際に乳幼児と関わる場所として、1回目の実践では、学内の施設「子ども・子育て支援研究センター」(以下、センター)を利用した。このセンターの面積は約146㎡、子どもと保護者が集うことのできる絨毯張りの遊戯スペースやテラス、保護者などの相談に乗ることができる相談室などが配置され、多くの玩具や絵本、仮装遊びのグッズなど、乳幼児のための遊具が揃っている。毎週火曜日と金曜日の10時から15時まで、保護者が乳幼児を自由に遊ばせたり、お互いに交流をしたりする場所として地域住民に無料で開放されている。資格を持ったパートタイムの保育士が2名常在しているが、託児ではなく、保護者が自分の子どもを常に見守ることがこのセンターの利用条件のひとつとなっている。本センターは子育て支援に関連する授業等で、学生が、保護者の了解を得たうえで、実際に子育て支援活動に参加することができる施

設として、2010年度にオープンした。利用者数は日によって変わるが、平均して1回につき10組から15組の親子が訪れている。保育園に通っていない、幼稚園に入る前の0歳から3歳までの乳幼児と保護者の利用がほとんどであることから、3歳児未満の乳幼児にできる造形活動として「シール貼り」を論者(指導者)から学生へ提案した。

●活動内容について

おおむね1歳3ヶ月～2歳未満の発達として、「歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強くなる。」ということが保育所保育指針に明記されている。

これらの「つまむ、めくるなどの運動機能の

発達」や「環境に働きかける意欲」, 「みたて活動」, 「人や物への関心」を育てる活動の一つとして, 「シール貼り」は, 多くの保育園で0歳児クラスから実践されている活動である。赤や青などの円形のシール(直径1.5cm~3cm)を保育士が用意した台紙の上に貼ることにより, 乳幼児は何かしらのイメージを作り上げて(仕上げて)いく。

写真1はN保育園0歳児クラスでの活動例である。9月に行われたもので, 子ども達の約半数は1歳の誕生日を迎えているクラスである。近所の果樹園へのお散歩やおやつなどの時間などで子ども達が大好きになり, 身近に感じている「ぶどう」をモチーフとしている。保育士が用意した「デザート皿」にぶどうを盛りつけていくものである。

この活動を行う時の留意点として, 「シール台紙からシールを剥がして, 用意された台紙に貼付けるという一連の動作が, 子どもにとっては容易でないことを理解し, ゆっくりと見守る」ということが挙げられる。用意する台紙は「子どもの生活と関連させる」工夫が必要であると

ともに, 「あまり要素を増やさない(複雑なものにしない)」「紙の大きさ」などに注意を払う。

写真2は2010年度広島県保育団体合同研究会の分科会で「うまくいかなかった活動」として発表されたものである。結果的に, 保育者が「ここにべったんして」と場所を示し, 子どもは意味も判らずその指示に従うという活動になってしまったという報告であった。イチゴのシール貼りについては, シールの直径が小さすぎたこと, こいのぼりのタンポ筆描画については, 台紙が小さすぎたことによって, 1歳児クラスには難易度が高くなり, 子どもが思い切った活動を行えず, 「楽しさ」を味わえなかったことが原因だと分析されていた。また, 子どもたちが自発的に「シールを貼りたい」と思うような「生活に関連したモチーフ」や「導入」の大切さが指摘された。さらには, 幼児の造形活動は「子どもと保育者の対話」のための空間と時間であると捉えることが必要であるという考察がなされた。

●学生たちの実践

以上の事柄を説明した上で, シールを貼り付



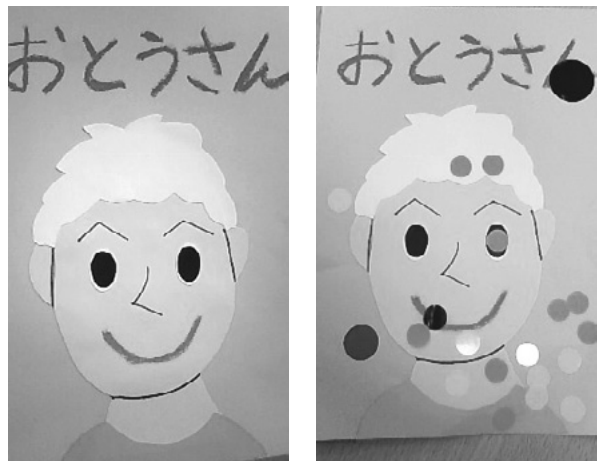
(写真1) シール貼り「ぶどう」
N保育園0歳児クラス 2010年



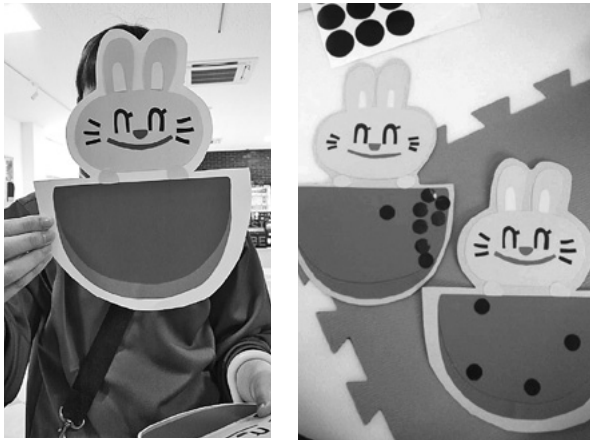
(写真3) 子ども・子育て支援研究センターでの実践の様子 2011年6月



(写真2) シール貼りとタンポ筆
Y保育園1歳児クラス 2010年



(写真4) 「おとうさんの髪とお髭を貼ってね」



(写真5)「すいかの種はどこ？」

ける台紙の制作を1回目授業(90分)で行い、2回目授業でセンターに入り、子どもたちおよび保護者とシール貼りを行った。(60分)

●実践を終えて

多くの学生は子どもと行う活動に期待を寄せ、考え、工夫をして台紙を作成した。写真4の学生は6月の「父の日」から着想を得て、髪と髭の部分に黒いシールで貼っていくという台紙を制作した。幼い子どもは学生の意図した場所に、意図した色のシールを貼ってはくれないが、仕上がった「お父さん」は微笑ましく、子どもは「お家を持って帰って、お父さんにあげる」と大喜びであった。同様に、学生も子どもの楽しみや達成感を援助できた喜びを得たようであった。写真5の学生は、子どもの喜ぶカラフルな色使いで、可愛らしい台紙を作成した。ウサギの顔の部分も画用紙を切り貼りして丁寧に作っていった。子ども達も「丁寧に心を込めて」作られた台紙の魅力を感じ取り、楽しく活動を行っていた。

学生の93%は今回の活動を「楽しかった」と感じ、「満足している」と答えた。難しかった点としては「子どもと打ち解けるのに時間がかかった」「お母さんが間に入ってくれなかったら、子どもとコミュニケーションが取れなかった」「保護者とのコミュニケーションが上手く取れなかった」「子どもの集中力が短いには驚いた」「他のおもちゃに気を取られてあまりシール貼りに興味を示してくれなかった」などが挙げられた。また、「1歳から2歳の子どもにとって、シールを剥がして貼ることが、こんなに難しいことだとは実際に見るまでは信じられなかった」という学生もいて、「子どもと共に行う実践」が、学生の幼児理解を深めるために重要であることが再確認された。

3.-2 実践報告「造形まつり」

●場所・対象児について

1回目の「シール貼り」は46名の学生を2グループに分けて行ったが、今回は、一斉に行うことにした。授業時間内に行うため、他の授業へ迷惑をかけないことなども考慮に入れ、本学の図画工作室と造形演習室の2教室を使用した。対象児については、センター利用者への自由参加の呼びかけに加えて、近隣の保育施設「Tプレイスクール」に参加を依頼した。Tプレイスクールは自立歩行可能な年齢から就学前までの子どもが通っている私立の施設で、給食室や園庭などを持たないため認可外であるが、保育園として利用する共働きの保護者も多い。また「外遊び」を中心とした活動が特徴的で、子どもの健康や体力向上のために幼稚園として選ぶ保護者や、幼稚園と併せてこの施設も利用する保護者もいる。Tプレイスクールからは年中児(約15名)が参加することになり、対象児の年齢層は1回目3歳未満であったことに対し、0歳から5歳未満までに広がった。

●活動内容について

近年、子育て支援のニーズの高まりから頻繁に開催されるようになってきたイベントで「子育てまつり」や「あそびまつり」と呼ばれるものがある。広いスペースで、「身体遊び」や「造形遊び」「音楽遊び」など、色々な遊びを体験できるコーナーが設けてあり、育児相談や歯磨き指導コーナーが設定される場合などもある。自由に歩き回りながら楽しむ「お祭りの出店」のようなイメージから「まつり」という言葉が使われていると思われる。このような子どもとその保護者のためのイベントは広島では2011年度、「保育まつり」(5月・広島特別支援学校)「子育て応援団すこやか2011」(5月・グリーンアリーナ)「旧日銀をあそぼう!笑顔あふれる遊びの天国」(11月・旧日本銀行広島支店)などが開催されている。

2回目の実践は、このような「あそびまつり」にヒントを得て、造形分野のあそびについて考え、乳幼児とその保護者を対象とした「造形あそびまつり」を開催するというものである。具体的には、造形的な遊びができるブースを多数用意し、乳幼児や保護者が自由に行き来して、造形的な遊びを体験して楽しむ場所を提供するというものである。

学生はグループごとに「造形表現」の授業で

行った事や、教科書などを参考にして、自分たちが提供する造形あそびを考え、実際にやってみて、子ども達との実践に向けて準備をする。その活動が子どもにとってどんな魅力や意義があるのかということも考えた上で「あそび」の内容を決めるために、ワークシートを記入しながら立案して行く。実践の時間が90分ということも考慮し、予め作っておく部分と子どもにやってもらう部分なども考え、材料を用意していく。

●学生たちの実践

学生たちは自由にグループを組んで、あそびを考えていったが、その結果できたブースは以下のようなものであった。

活動内容・使用材料
A 足あとペタペタ 模造紙・絵の具・タライ・タオル
B ケーキを飾ろう 段ボール・模造紙・コーンスターチ梱包材・マジックペン・絵の具・筆
C さかなすくい 「魚に色を塗って水槽に入れよう」 食品トレー・針金・和紙・マジックペン・段ボール・透明ラップ・折り紙
D 石を貼ってお絵描きしよう 石・紙皿・ボンド・クレヨン
E 手作り楽器で楽しもう 紙コップ・割りばし・カラービニールテープ・小豆・ビーズ
F 小麦粉粘土でコネコネ 小麦粉・食品用色粉・油・食塩・水・クッキー型
G 新聞紙ロケットで風船にシュート 新聞紙・カラービニールテープ・トイレットペーパーの芯・輪ゴム・風船
H 磁石でべったん、魚つり 色画用紙・クリップ・磁石・新聞紙
I マイ・ワッペンを作ろう フェルト・ボンド・リボン・安全ピン
J 野菜でハンコ、おもしろい形がいっぱい 野菜（オクラ、レンコン、ピーマン、ジャガイモ、トウモロコシ、ニンジン）絵の具・筆・バット・バケツ・画用紙・割り箸・ボンド

A 足あとペタペタ

〈活動内容〉造形表現の授業の導入として行った「絵の具をつけた素足で、紙の上を歩いて足型でイメージを創り上げる」活動から着想を得て、「子どもの足型を取る」コーナーを設置。数色の絵の具をバットに用意し、大きな紙の上を子どもが自由に歩き回れるスペースを作り、さらに「足型」に日付と名前を書き込んで、持ち帰りができるように画用紙も準備した。足を洗うタライやタオルも用意した。

〈子どもの反応〉知らない場所で靴を脱いだり、知らない人（学生）に手を引かれたりすることに抵抗を感じる子どもが多く、泣く声も聞こえるコーナーとなった。学生は子どもの激しい人見知り「心が折れそう…」などとつぶやいて消沈していたが、保護者には大人気で「是非、足型を取りたい！」と希望する多くの保護者の「助け舟」によって盛況に終わった。また、Tプレイスクールの子供達はセンターの子どもに比べ、年齢が高いことと、保護者から離れて生活をする時間があるということなどから、こうした活動への参加が容易にできるようであった。

B ケーキを飾ろう

〈活動内容〉当初、教科書「すべての感覚を駆使してわかる乳幼児の造形表現」を参考にし、「コーンスターチ工作」をやりたいと希望していた。コーンスターチ工作とは、トウモロコシを原料にした梱包材で、水に溶けて付着する性質を利用する工作である。大人の親指くらいの大きさの柔らかい円柱を、つなぎ合わせ、形をつくり、彩色をしていく。本来の用途はエコロジーな梱包材であるが、子ども用の工作材料としても注目されているものである。

しかし、購入した梱包材がトウモロコシを原



(写真6) 水彩絵の具で「ケーキを飾る」男児



(写真7) 出来上がったケーキ

料としたものであったにも関わらず、水で付着しないタイプのものであったため、急遽予定を変更することになった。梱包材が大量にあったのでそれをプールのようにして楽しむという

案も出たが、それでは「造形あそび」にならないという意見が出て、ケーキのデコレーションを子ども達と一緒に行うという活動に決まった。子ども達は梱包材にマジックで好きな色を塗って、それを大きなケーキ（段ボールと模造紙で作成）にボンドを使って貼付けたり、ケーキに直接絵を描いたりする。

〈子どもの反応〉「苦し紛れ」の代案であったが、子ども達には人気のコーナーであった。水彩絵の具で、壁面のような支持体に描く活動は、家庭ではなかなかできない造形活動であるが、そのダイナミックな感じを子どもたちは楽しんだようであった。

〈子どもの反応〉「苦し紛れ」の代案であったが、子ども達には人気のコーナーであった。水彩絵の具で、壁面のような支持体に描く活動は、家庭ではなかなかできない造形活動であるが、そのダイナミックな感じを子どもたちは楽しんだようであった。

C さかなすくい

〈活動内容〉このグループは一連の流れのある活動を考えた。大きなタライに食品用発泡スチロールトレイを切り抜いて作成した魚を浮かべ、子ども達はそれらの魚を「金魚すくい」の要領で捕獲する。次に子ども達は捕った魚に色を塗ったり、顔を描いたりする。子ども達が仕



(写真8) 魚をすくう子どもたち

上げた魚を段ボールと透明ラップで作成した「水槽」に入れて子ども達にプレゼントするというものである。

食品トレーを魚の形に切り抜く、魚をすくう道具（ポイ）を作る、子どもにプレゼントするための「水槽」を作ると言うように、作業量が多く大変であったが、それらに加えて子どもが魚に色を塗るためのカラフルなテーブルを段ボールで作成するなど意欲的であった。

〈子どもの反応〉子ども達が「自分ですくって」「自分で色を塗った」魚を「水槽」という「額」に入れ「価値を与えた」活動であり、子ども、保護者ともに満足したコーナーであった。

D 石を貼ってお絵描きしよう

〈活動内容〉当初「石に絵を描く」という活動を考えていたが、実際に石を探し始めて「絵が描けるような質感や大きさの石がなかなか見つからない」という問題に当たった。絵を描くのに適した石の条件として「小さすぎず、大きすぎず」「表面が滑らかである」という2点が挙げられるが、そうした石は川や海など水流のある場所以外では見つけることが難しい。材料調達との兼ね合いで、結局は「紙皿に石を貼って絵を描く」という活動に修正した。

〈子どもの反応〉円形の支持体に描くという経験は日常では珍しいため、楽しんでいる様子が伺えた。石という身近な素材も子どもたちを惹きつけたようであった。



(写真9) 石を貼った紙皿にクレヨンで絵を描く男児

E 手作り楽器で楽しもう

〈活動内容〉このグループは紙コップやペットボトル、小豆やビーズなどを使用し、様々な「手作り楽器」を作り、それらを子ども達と一緒に演奏して楽しむという活動を考えた。しかし、



(写真10) 手作りマラカスを楽しむ男児

「どこまで準備をして、どこから子どもと一緒に
行うのか」を明確にしないまま当日を迎え、
苦勞する学生の姿が見られた。結局「見本」と
して作った楽器を子ども達に渡して遊んでもら
うという活動に終わってしまったが、他のコー
ナーを手伝ったり、子どもと遊んだりして、「ま
つり」自体への参加は楽しんだようであった。

F 小麦粉粘土でコネコネ

〈活動内容〉幼稚園のプレスクールなどでもよく
行われる「小麦粉粘土」を行う事に決めて、
準備を進めた。実際に試作してみると、最初は
粘土の堅さ調節が思うようにいかない、食品用
色粉が上手く混ざらないなど、試行錯誤が必要
であった。「小麦粉粘土の作り方」というマニ
ュアルを見ると、簡単に出来そうな印象を受け
るが、「子どもと行う前に試作してみる」ことの
大切さを学んだようであった。

〈子どもの反応〉このコーナーは子ども達に大
変な人気で、この場所から離れない子どもも見
受けられた。「造形遊び」から「ごっこ遊び」
へ展開していく子どもたちの姿もあり、学生と
子どもの距離が近いコーナーとなった。



(写真11) 小麦粉粘土を楽しむ子どもと学生



(写真12) 活動I「マイ・ワッペンを作ろう」
で作成したワッペンを服に付けて小
麦粉粘土を楽しむ女児

G 新聞紙ロケットで風船にシュート

〈活動内容〉造形表現の11回目の授業「雨の日
のあそび」で制作した「新聞紙ロケット」を使っ
てゲームを行う計画を立てた。「新聞紙ロケッ
ト」は新聞紙、ビニールテープ、割りばし、ゴ
ムなど身の回りにある材料を用いて、小さな子
どもでも無理なく作って遊べるものである。

〈子どもの反応〉子どもたちはシューティング
ゲームとしては楽しんだようであったが、「造
形活動」の要素が無かったのが「授業」という
観点からは残念であった。



(写真13) 風船に向けて新聞紙ロケットを発射
する女児と援助する学生

H 磁石でぺったん、魚つり

〈活動内容〉磁石での魚釣りは保育園や幼稚園
でのおまつりなどでも定番の「簡単に出来て、
子どもにも人気のあるゲーム」である。沢山の
魚を用意するなど、学生たちの努力は見られた。

〈子どもの反応〉一方、「子どもの造形活動」
については、「釣った魚に模様を描く」という
ものであり、子どもにとっては「釣る」という
強いインパクトのある行為の後ではあまり意味



(写真14) 魚釣りを楽しむ男児



(写真16) 野菜の断面を写し取る活動

をなさない活動のようであった。

I マイ・ワッペンを作ろう

〈活動内容〉この活動は車・星・家などの形のフェルト台紙に、小さなフェルトをボンドで貼ってワッペンを作るというものである。台紙はフェルトを3重にして厚みのあるものを作成し、子どもたちが貼りこむ様々な形のパーツを用意した。1回目の実践「シール貼り」の応用的なものである。

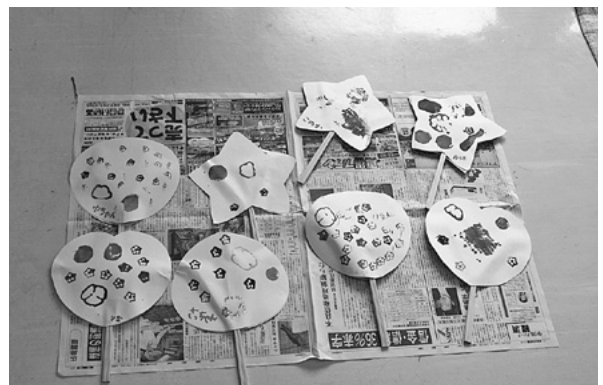
〈子どもの反応〉子どもたちは「自分の色」「自分の形」を選んで貼る作業を楽しんでいる様子であった。子どもたちは作成したワッペンを服に付けてもらい、他の活動を楽しんでいた。(写真12) Tプレースクールの引率保育者もこの活動に興味を示し、コストなどを訊ねていた。



(写真15) 台になる形を選び、パーツを貼る

J 野菜でハンコ、おもしろい形がいっぱい

〈活動内容〉この活動は野菜の断面の模様を写しだすものである。オクラ、レンコン、ピーマン、ジャガイモ、トウモロコシ、ニンジンなどを用意し、絵の具に付けて、ハンコの要領で断面の形を紙に写し出していく。このグループは夏という季節も考慮に入れ、出来上がった版画



(写真17) うちわの形に仕上げて子どもに渡す

を「うちわ」の形に仕上げて子どもたちに渡した。
 〈子どもの反応〉知っている野菜の「意外な形」に子どもたちは夢中になって、写し取る活動を楽しんでいる様子が伺えた。

●実践を終えて

90分という授業時間の中で10コーナーを持つ「造形まつり」を開催するのは、学生にとっても、参加者にとっても「盛り込みすぎ」の感があったことは否めないが、学生、参加者両者とも楽しみ、盛況に終わった。8月2日のこの「造形こどもまつり」にはセンター利用の乳幼児とその保護者がおよそ20組、Tプレースクールからの年中組幼児の参加がおよそ15人あった。センター利用の親子の中には幼稚園が夏休み中の兄弟児の参加もあって、子どもの人数・年齢層ともに、初回の実践より充実したものとなった。また、初回の実践では、親子が遊んでいる中に学生が入り込み、「シール貼り」をするという形を取ったため、親子-学生の組み合わせが固定的であったが、「造形こどもまつり」においては、流動的なものであった。その結果、子どもや保護者とのコミュニケーション能力が低い学生にとっては、その苦手意識が軽減されたようであった。1回目の活動後、「子どもと接す

るのが苦痛であった」「保護者と全くコミュニケーションが取れなかった」と記述した学生が、2回目の活動では「子どもと楽しく活動ができた」「保護者と会話をすることができた」と記述し、学生の「活動への満足度」も上昇^{vi}した。

4. 学生の「学び」と乳幼児の「育ち」のための造形表現の授業のあり方 —まとめにかえて—

授業内で子どもたちと「造形活動」を行う実践は、学生数、授業時間、実践場所、乳幼児の動員などの兼ね合いが非常に難しく、準備やセッティングに多くの時間と労力を必要とする。しかし、実際に乳幼児やその保護者と触れ合いながら、造形活動をすることによる「学び」は大きく、今後も可能な限りこうした実践を取り入れていくべきであると考えられる。

学生の最大の「学び」としては以下の点が挙げられる。学生の多くは、乳幼児と関わる経験が極めて少なく、その月齢や年齢に応じた「可能」「不可能」を実感していない。学生は、様々な授業で「身体の発達」「心の発達」「言葉の発達」などを知識として学ぶが、乳幼児との活動という実践を通して、それらを総合的なものとして捉え、「乳幼児の造形表現能力の発達」について、「乳幼児の身体的能力の発達」と関連して経験的に理解を深める。

それでは、こうした「実践」に参加する乳幼児の「育ち」に関してはどうであろう？ 乳幼児にとって造形表現というものは身体表現や音楽表現と同様、体を主体的に動かし、自身の存在を確認しながら外界に働きかけていく活動である。その中で芽生える「思い」を保育者や保護者が受け止め、共感し、コミュニケーションをとることによって、造形活動は子どもの成長に寄与する活動となる。今回のような実践は多くの場合、その性質上、学生と乳幼児との関わりにおいても、活動内容においても「1回限り」のものになりがちである。乳幼児の「育ち」を考慮した場合、家庭や保育所・幼稚園のような「連続性」を持つ環境がより理想的であることは否定できない。同時に、乳幼児にとっては短時間であっても、「知らない人と出会い」「自らの手や体を動かし」「何かを作り上げながら」「コ

ミュニケーションを取る」という行為は「経験」に他ならない。乳幼児は日常の中でそういった「新しい経験」を積みながら成長する。その上良質な経験が、乳幼児の発達に大きな影響を与えることは事実である。学生一人ひとりが、それらのことを理解した上で、乳幼児や保護者とコミュニケーションを主体的に取りながら、自覚と責任を持って、実践に参加するようなプログラム作りが今後の課題である。

参考文献

幼稚園教育要領解説, 文部科学省, 2008年(平成20年10月)
大場幸夫(監修), 保育所保育指針ハンドブック, 学研, 2008
中川香子・清原知二(編), 新時代の保育双書 保育内容 表現, みらい出版, 2010
平田智久・小野和(編), すべての感覚を駆使してわかる乳幼児の造形表現, 保育出版, 2011

-
- i 2009年8月から10月にかけて、高校生6319名を対象に行った調査。高校生女子においては「保育士・幼稚園の先生」が全体の5.3%を占め、「なりたい職業ランキング」の1位であった。
 - ii 「表現」に関連する科目として「身体表現」「音楽表現」「造形表現」などがあげられる。
 - iii 幼稚園第一種免許取得のためには「保育内容総論Ⅱ」「保育内容(音楽表現)」「保育内容(造形表現)」「保育内容(身体表現)」「保育内容(総合表現)」の中から3科目を履修しなくてはならない。
 - iv 「シール貼り」は2グループに分けて行ったので、授業計画上は2回になっているが、学生は所属するグループでの1回参加である。
 - v 46名の学生のうち、2名が「子どもと行う活動に楽しさを感じられなかった」と答えた。
 - vi 2回目の活動後、46名全員が「楽しかった」と答え、子どもと行う実践授業について「満足している」と答えた。